

国立国語研究所学術情報リポジトリ

A historical aspect of conjunctive particles denoting cause and reason : A contrastive approach using language maps and written materials from the past

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 彦坂, 佳宣, HIKOSAKA, Yoshinobu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002138

原因・理由表現の分布と歴史

——『方言文法全国地図』と過去の方言文献との対照から——

彦坂 佳宣

(立命館大学)

キーワード

原因・理由表現, 『方言文法全国地図』, 言語地理学, 方言文献, 方言史

要 旨

原因・理由の接続助詞について、『方言文法全国地図』と各地の過去の方言文献とを対照してその歴史を推定した。基本的には京畿から「已然形+バ」→カラ→ニ→デ→ケン類→ホドニ→ヨッテ→サカイの放射があったと考えた。西日本にはこれらの伝播が重なり、東日本ではカラ辺りまでで、西高東低の模様がある。それは京畿からの地理的・文化的距離やカラの接続助詞化の経緯差によるところが大きいと考える。カラの他にデ・ケン類・サカイなどもかなり地域の変容が想定され、上の放射順が必ずしも順当に受容されたとは限らない。また、標準語のカラとノデに似た表現区分をもつ中央部ともたない周辺部とに分析的表現に関わる差異があり、中央語と地方語との性格の違いも認められる。

1. はじめに

『方言文法全国地図』(Grammar Atlas of Japanese Dialects, 以下 GAJ) に原因・理由を表す地図類がある。これを過去の方言文献と対照させて、全国的な歴史を考察したい。地図類は、GAJ33図「雨が降っているから行くのはやめろ」、35図「だから言ったじゃないか」、37図「子どもなのでわからなかった」などである。

33図を主とする解釈も小林賢次(1992, 1996)・佐藤亮一(1992)・西日本を主とした彦坂(2000, 以下, 前稿)などがあり、GAJ以前には、北条(1973, 1975)・小林好日(1950)・上村(1951, 1998)などがある。これに対し本稿は、新たに、東西の分布差の経緯、ノデとカラに類似する表現区分とその地域性の指摘、デ、サカイ、中国地方以西のケ(一)・キニなどケン類の解釈について考察を深めたつもりである。

国語史(以下、主として京畿・江戸—東京の中央語史を指す)の分野では、京畿について小林千草(1973, 1977)・安田(1977)・山口堯二(1996)、江戸語・東京語は原口(1971)・吉井(1977)などがある。中央語は方言に影響をもつ新形式の発信源として重要であり、その成果に導かれる点が多い。しかし、本稿は出来る限り各地の方言史も考慮し、その目で日本語総体としての歴史を考える一端としたい。方法としては、GAJによる今日の分布の解釈に、国語史や過去の方言文献の調査を加え、時間差のある分布模様の比較を通じた考察を試みる。

ところで言語地理学的研究はいわゆる記号の恣意性を前提とする。離れた地点に類似形がある場合、偶然に一致した可能性が低ければ形式と意味とに内的必然性がないという立場から歴史的に同源のものと見る。しかし、本稿が対象とする文法事項は関連事項間の体系的なあり方の中でその動向が決定される面がある。実際には地理学的解釈の原則が適用される場合も多いが、一方では問題となる形式の体系的な位置とその動向にも注意しながら考察を進める必要があろう。こうした点で、次のような原則を立てておく。

- (1) 言語地理学の原則による解釈で矛盾のないものはそれを採る—いわゆる方言圏論、隣接分布など。中央語史にあったものは伝播の可能性を考える。
- (2) 離れた同類形は、用法の検討を加えたうえで歴史的関連を考える。個々の形式の体系的なあり方を考慮し、関連用法（例えば以下に述べるバの確定と仮定、ニの順接と逆接、デの取る文末表現の多様性など）にも注意して同源の認定、かつての分布やその変化について通時的解釈の参考とする。関連する国語史の知見も活用する。

(1)はほぼ従来の語彙研究を主とする原則、(2)が本稿のような文法事象を対象とするものである。

2. 今日の模様—GAJ 関連図の枠組みとその解釈

まず今日の分布からの解釈を、33図「雨が降っているから行くのはやめろ」と37図「子どもなのでわからなかった」を中心に考える。なお、北海道は歴史も浅く、いま考察対象としない。

この2図は理由の言い方の代表図であるが、また分布の一部が大きく異なっている。33図はカラが多くノデが稀であり（35図「だから言ったじゃないか」も同様）、37図はカラが少なくノデその他33・35図にない形式が現れる地域がある。この差は、永野(1952)の言う〈文末が客観的表現の場合はノデ、主観的表現ならカラが使用されやすい〉ことと連動していると思われる（ノデ・カラの意義素論では国広 1992 に反論もあるが、今は永野説、特に文末表現との対応傾向の違いの指摘を採る）。

2.1. 33図「雨が降っているから行くのはやめろ」の解釈

略図を図1に示した。文末が主観的な命令表現の図である。

前稿は西日本を対象としたが、分布解釈と国語史の知見も加えて、「已然形+バ」（以下〈バ〉）→カラ→ニ→デ→ケン→ホドニ→ヨッテ→サカイの歴史を推定した。しかし、残した問題もある。

中国・四国以西のケン類（三角印類）の経緯がそのひとつ。前稿ではサカイの可能性をさぐるに終わった。カラが東日本に広く、西日本に散在する経緯も深める必要がある。さらに33図と37図の分布差からは上述カラとノデの表現区分の問題がある。また、中央からの放射順が各地にそのまま伝播するわけではなく、地域的に特定語形の変化や隆盛も考えられる。これらの点を改めて全国的な視野から考えてみる。

〈バ〉 図の中でこれが最も古い形式と考える。必然確定（以下「理由」とも）の〈バ〉（「已然

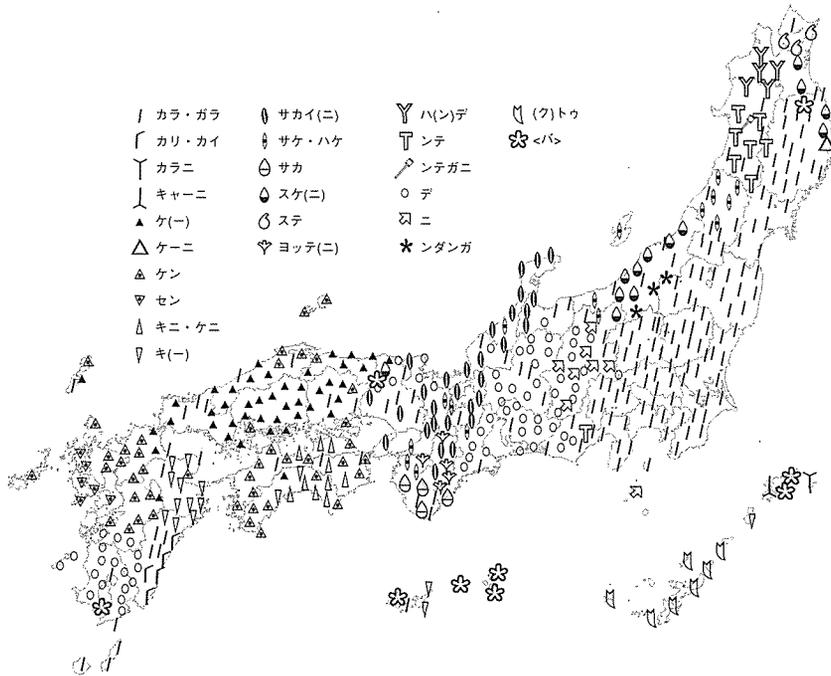


図1 GAJ33 図「雨が降っているから行くのはやめる」

形+バ」相当)は岩手県・兵庫県・鹿児島県に各1地点, 沖縄県にやや多くあるのみで, かなり古い用法の遺存に違いない。

今日〈バ〉一般の用法は, 日本の東西周辺部に仮定条件(167図「雨が降れば船は出ないだろう」他)の勢力が強く, 已然形から仮定形への変化が進行し, その仮定条件すら周辺に追いやられている。すると, 已然形相当の用法の残存であるこの〈バ〉は一段と古く, またわずかな遺存の分布からして他の諸形式に増して古いものに違いない。

カラ カラ類は東日本に広く, 西日本に散在, しかし九州(カリ・カイ)・奄美にもある。この広さからみてカラないしカラニも古い。しかし国語史では, もと体言であったカラの接続助詞化は主として格助詞の「起点」などの意味からと思われ, 〈バ〉に遅れてこれを後から淘汰していったと考える。今日, 東北日本海側にあるンテガニなどカラ内在形は北条(1975)のとおり古くカラ又はカラニが存在した証であろう。

ただ, 国語史研究での指摘は乏しいが, 全国規模で見た場合, カラニ・カラ形には用法に東西差のあることが注意される。近畿・中国地方では, 接続助詞テカラ形で継起的ないし単純接続の用法が強い。例えば, NHK『全国方言資料』の奈良県下北山村「イキオツテカラニ カセンガ カカッタンデ…(よく行ったが, 後で架線がかかったので…彦坂注)」(8:p.228), 同じく広島県水内村「アタマカラ ユーテカラカ…」(5:p.170, 末尾のカは強調の由), 熊本県熊本市「マー コギャンモ オルモンダロカッテ オモチカラ(まあ, こんなにも(魚が)いるものだろうかと思ってねえ)」(6:p.252)などが見え, 他には『瀬戸内海言語図巻』75図「年寄りが昔

のことを思い出して『…おほえてから。』の質問で全域テカラが頻出することなどがそれである。九州では北西部・南部に継起接続や逆接を表す複合形にカラが内在し(神部 1992), 沖縄では仮定条件のカラさえ見られる(GAJ168図「あした雨が降ったらおれは行かない」, 内間 1994)。こうした多彩な用法の中で原因・理由の用法はその一部である。一方, 東日本とくに太平洋側にこうした用法のカラ・カラニはまずない。この地域差のある経緯は後に文献も参照して考える。

ニ 点在する中部地方のニは地域独自の形式かと思わせるが, 国語史にもある。京畿の中古前後の文献ではニに継起的用法や逆接・順接があり, 文脈依存性が高い。中部地方のニも同様である。逆接では, GAJ40図「植えたのに枯れてしまった」に近畿・関東を中心に広くノニ, 対してニが中部地方, 中国・四国・九州東北部にある。後述のように古く中国地方にも順接・逆接のニがある。こうしてニ総体としては, かつて中部地方以西に広がったと考えられる。中部地方のニの順接・逆接両用(上の33図・40図)はそうした用法の遺存に違いない。その後, 西日本のニは度重なる新興形によって逆接用法だけが残った。中部地方では東部のカラに阻まれ, 吹き溜まり的に残存し, 両用法が残っている。この位置からしてカラに次ぐものとする。

デ デは近畿周辺部と中部地方にあり, 国語史でも京畿に散見される点から, やはり京畿からの放射と見る。ニテ>デによること, 中部地方でニより西側に分布する点で, ニの後からこれを塗り替えて少なくとも中部地方まで伝播したと考える。離れた九州南西部のデも勢力があり, 後述37図にも中部のデと同じく広く現れる。この点で本州のデと通うものと考えられ, 同時期一斉ではないにしても, かつてはデが中部以西から九州末端にまで広がったと推測する。連続したと見ることは神部(1992:p.118)にも指摘があり, 確かにその中間にも, 中国地方を主として『全国方言資料』にも見え, 『瀬戸内海言語図巻』では中国・四国東部や九州東部にも散見され(上:p.39), 確実であろう。デには異形があり, 静岡県のンテは山口幸洋(1987:p.237)によればニテの変化と言う(『図説静岡県方言辞典』p.744の図にも多い。秋田県にある類似形も中にはこの可能性のものもあるか)。

ケン類 中国・四国・九州北部のケン類(ケ(一)・キニなど)は, かつてデが連続したと見ればここに割って入ったことが推定され, デより新しい可能性が高い。出自については諸説あり, 後で文献側の模様も加えて検討する。ケン類内部の変化は, 中国地方でケンがほぼ外側, ケ(一)が内陸山間部, またケニもあり, 分布と語形変化の自然さからケニ/ケーニ>ケン>ケ(一)などが考えられる。四国のキ系類はキニ>キン>キ(一)の変化が想定される。キ~類はケ~類からの音転であろう。九州では西からケン・ケ(一)・キ(一)の並びで, ケ~側が古くキ~側が新しいと思う。先行したデを分断する形で中国・四国から伝播し, 九州北半部にまで伸張したと見る。

ホドニ, ヨツテ類, サカイ類 国語史も参考にすると, その後, 京畿でホドニが生まれ, 続いて今日近畿に分布するニヨツテ・ヨツテニなどヨツテ類が生じ, 最後にいま近畿から北陸, 東北地方日本海側にあるサカイ類の伸張があったと考えられる。これらが西日本への伝播がどこまで進んだかは, ケンの出自とも関連して, 問題が残る。

東北地方日本海側の諸形 GAJ 以前の諸氏の研究で、近畿から海運によってサカイ類が伝播し、新潟県・山形県にかけスケ・サケとなり、岩手県沿岸にも達したとされる。秋田県から青森県のンテ・ハ(ン)デの類はそれ以前に中世近畿地方のホドニの変化した形とされる。すると、先行するカラ・カラニの上にこれらがかぶさった形と見る。ただ、文献も参照すると、体言「境」の広がりや理由化の問題は各地で複雑な経緯が考えられる。下北地方のステはよく分からない。

九州・沖縄地方の諸形 九州は先行のカラ・デを塗り替えながら北部からケン類が進入したと見た。長崎県西部のセン・シェン類は上野(1979)によればケン類と並列的な形をもつ点から、その変異の可能性はないか(ソエニ説もあり。『瀬戸内海言語図巻』31図にある瀬戸内海のショイ・セニ類とも通う点もあるか、未考)。九州南部で東部にカラ類・西部にデが分布する理由は、藩境が関係するのは確実(神部 1992 も示唆。また、旧薩摩藩が宮崎県側に張り出した模様とも酷似)として、今それ以上の説明は難しい。

五島列島のテン・デン、トーデは、記入を略したが、神部(1992)によればトニ(逆接用法もある由)・トデからと言う。古態のニ・デの一端が見えて、本州との連続を示唆しよう。

沖縄諸島では東西に〈バ〉、中央にクトゥ・トゥがある。分布からは古い〈バ〉の中にクトゥ(体言「事」—中本 1990 など)が独自に生じたと考える。クトゥ類は内間(1994)で逆接用法も報告される。これは事柄の句的提示が文脈的に各種の用法を発現させたものと考えられ、その中に理由の用法もあると見る(GAJの解説でも指摘)。八重山列島にはキ・キーがあるが、由来は分からない。

全体には、西日本へは複数形式の度重なる伝播があり、東日本では日本海側を除きカラの比較的単純な模様が特徴である。京畿との地理的・文化的距離、およびカラその他の地域的経緯が関わっている。なお、35図「だから言ったじゃないか」の場合も似た分布で解釈は同じである。

2.2. 37図「子どもなのでわからなかった」にみる33図との表現区分

表現区分の形式と地域差 33図に対し37図に新しく現れ、全国規模で見て意味があると思われる形式を図2-1・2-2に原図の地点のまま示した(沖縄は本土と無関係な発達と思われ略)。これには後で承接法の地域差も見る意図で、直前の断定辞部分に注目した36図「子どもなので～」も加えて整理した。

33図と同じ形式が新たに現れる点も含め、記号のある地点は基本的に33図と37図の表現性の違いに応じた区分のある地域である。そのほとんどは2種の型、問題の形式の直前や中間の断定辞部分を見れば、図2-1のノデ・ノダを中核とする準体助詞型と図2-2に示したモノ型の諸形が関与して、かつ主として中央部地域に分布するのが特徴である。

図2-1の準体助詞型は、関東から東北、新潟県に強く、近畿地方にもある。山形県・秋田県の「ダゲダ～」もこの類と思うが、あるいは次のモノ型かも知れない。33図と37図の表現区分は、関東以北がカラ対ノデ類で顕著に、近畿はサカイ対ノデでやや緩やかになされている。

図2-2のモノ型を主体とする諸形は、新しくデの現れる地点もあるがこれは後述するとして、中部地方から三重県を主とし、鳥根県・鹿児島県、東北地方の日本海側にもある。33図と37図と



図 2-1 GAJ37 図に新出する形式 (1) ノデ・ノダ類 (準体助詞型)
 — 36・37 図「子どものでわからなかった」より—

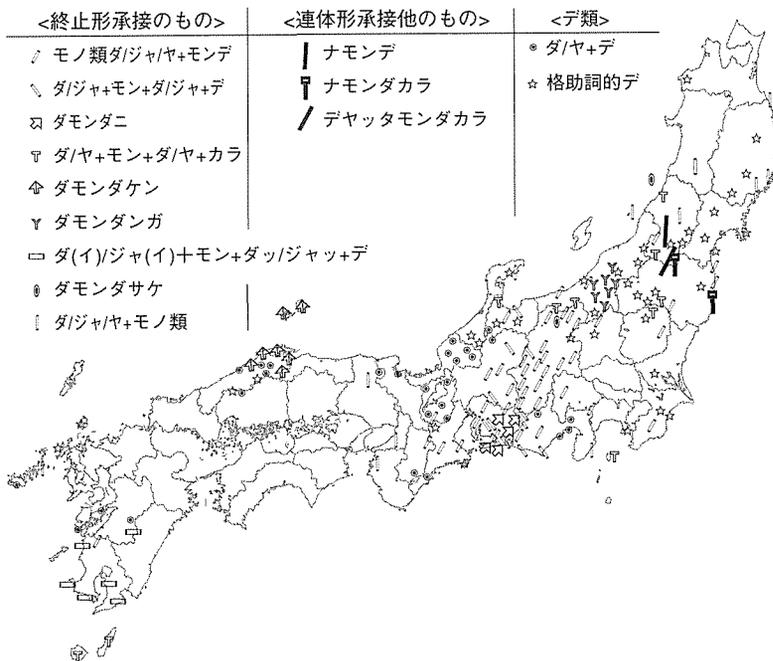


図 2-2 GAJ37 図に新出する形式 (2) モノ型・デ類
 — 36・37 図「子どものでわからなかった」より—

の表現区分は、およそ、中部地方と鹿児島県はデ（中部地方の一部にはニも）対〈モノ(+断定-ダ/ジャ等+)デ〉（愛知県東部は〈モノ(+断定-ダ/ジャ等+)ニ〉も）の型、新潟県はサカイ類対〈モノダンガ〉型、山形・秋田県でもモノを含む諸形が散見される。関東周辺はカラ対モンダカラ（劣勢）、島根県はケン類対モンダケンである。特に中部地方のモンデが広い。

関東・近畿のノデ類に対し中部地方・島根県がモノ型をとるのは、いわゆる準体法の地域差が関与すると思う。GAJ17図「行くのではないか」・同18図「行くのに便利だ」では、中部・中国地方北部はノを介さない「行くジャ〜」・「行くニ〜」の地域であり、これと連動して37図もノデ形の成立が困難なためモノで代替したと考える（従って、デをGAJ33図・解説の node > Nde > de のようなノの脱落とは見ない）。鹿児島県もトによる「行くトジャ」「行くトニ」の類でやはりノデになりにくかったと考える。なお、関東周辺に散見されるモノ型はノデのノに通うモノが時に採用されたのであろう。また、散見されるモノ・モンは末尾形を落としたものではないか。

さて、37図の文末が叙述文をとる表現性の特徴は次のように考えられると思う。準体助詞型もモノ型も準体言形式として共通する。こうした形式による事柄のまとめとしての前件句のあることが、後件句に事柄から大きく逸脱しない叙述レベルを主とする客観的表現性を求めるのではないか。それに対し、主体的表現性に富む33図は、カラが終止形承接のため、後件句に比較的自由な表現をとることができるのであろう。

これら表現区分のある最大の地域は、関東・近畿・中部地方など本州の中央部である。また図2-1・2-2で注意されることは、中部地方のモノ型が関東と近畿のノデを分断し、やや空白の地域も静岡県東部から山梨県、岐阜県西部などにある。すると、この表現区分は各地で個別に発生したと解釈される。ただし、同一圏でも地域によって形式は異なり、中部圏内は、福井県ではサカイを受容する中で旧来のデが客観的表現を担当し、北陸では同じくガンデ、新潟以北ではンガが担当している。

こうした表現区分傾向は、ノデの場合、近世後期以降の発達とされ(原口 1971; 吉井 1977)、それ以前に江戸や上方で準体助詞ノの発達が注釈など論理的な言語行為の中で見られていて(原口 1980)、そうした動向の中で各地に別個に生まれたものとする。江戸・上方・尾張といった都市地域で発生し、近隣に広がったのであろう。福井県・滋賀県また静岡県東部のデなどが中部圏のモンデ類を取り巻くように分布するのは、かつてデが展開した土壤に明確な表現区分のあるモノ型が都市部から広がったことを語ると思う。北陸ではさらにサカイが近畿的用法をもって主観的表現性の領域に進出して来ている。鹿児島県や島根県も、やはり個別発生と思われ、近世後期以後の発生ではないか。

沖縄地方もこうした表現区分はあるが、33図で体言クトゥによる文が主観的表現面を担当する点が特異であり、また33図のバ・クトゥ類に対し、37図では中止法かと思われるティ、八重山はキ・キー類が増えている。時期は不明であるが、これもこの地域固有の発生に違いない。

さて、36図を参照した、直前の断定辞の承接法は、図2-1・2-2全体として、関東以北と近畿地方は連体形承接が強いのにに対し中部地方は終止形承接で、承接法にも地域差がある。33図を含めた表現区分全体は、標準語の背景をなす関東地方のカラ対ノデが終止形対連体形で厳密な区

分があり、近畿周辺のノデ類はサカイの終止形承接に接近する傾向、中部地方はデ対モンデ類ともに終止形承接で区別がなく、やはり地域的特色がある。

なお、図 2-2 に示したが単独のデ形式は用法に地域差がある。関東以北では「子ども + デ」で格助詞相当であり、同じ形で鳥根・長崎島嶼にも多少ある。これを除く中部地方や近畿北部また九州南西部の「断定終止形 + デ」形が接続助詞として定着したものとする。後者は特定地域の表現区分にも関与している。

両図に表れる諸形 以上に対し、図 2-1・2-2 いずれも空白の地域は、同一語形が33図・37図の両表現を担当している地域である。それは33図に現れる、関東以北の一部のカラ、新潟から東北日本海側のサカイ類その他、中部地方はデ、近畿周辺はサカイやヨッテ類、中国・四国以西はケン類、そして九州東部のカラ、西部のデであり、多くは地方的な地域である。

以上、各形式の京畿からの伝播順、それにより形成された西高東低の分布模様を見た。さらに詳しい解釈は、デ・ケン・サカイなどに用法差も含めた地域的な隆盛も考えられ、京畿からの放射順と地域での個別的隆盛とを区別して捉える必要もあろう。この点は十分な解明は難しいが、以下で検討する。また、近世後期以降に生じたノデ類、恐らく同じくモノ型の表現区分をめぐって中央と地方に差のあることも明らかとなった。

3. 各地の過去の方言文献から

方言史と呼ぶには浅く、やや羅列的でもあるが、文献のある地域で過去の様相をさぐってみる。

3.1. 京畿地方

この地方は国語史の立場からかなりのことが分かっている。まず、重要な点を小林千草(1973, 1977)・山口堯二(1996)などの研究を参考にまとめ、また関連事項を補足する。

上代に裸已然形が確定表現を担当 (GAJ には無い)、続いて「已然形 + バ」が生まれ、必然確定 (原因・理由) はこの用法の一部である。格助詞であったヲ・ニも中古前後に接続助詞に加わった。中世には格助詞デが接続助詞となった。カラも俗語の世界で生きていた (松村編 1969; 安田章 1977) らしく、いくらかある。以上は文脈依存性が高い非分析的表現である。

これに前後して中世頃からは、体言ホド・カラまた形式動詞ヨッテに助詞ニ・デを付け、事柄のまとめとその依拠を示す分析的表現が現れ、次第に特色ある理由表現へと変化した。同時にサカイデ・サカイニも生まれているが、その盛行は近世末以降とされる。

さて、ロドリゲス『日本大文典』には上述の諸形がみえる。接続助詞との関連で格助詞カラとその周辺を見ておくと、ヨリが「書きことば・話しことば」両用に対して「話しことば」(p.552)、また、「橋から渡った／町から行た／舟から渡った」などの用法があるとする (p.406)。これは、福島(1992)が GAJ の29図「船で来た」・26図「息子に手伝いに来てもらった」・27図「犬に追いかけられた」・30図「一万円でお願ひします」などにカラ類が山形県・新潟県、九州西半部、沖縄などに分布することに注目し、かつての多様な用法の残存としたのと通う

点がある。愛宕(1992)にも似た指摘がある。類例は九州西部(九州方言学会 1969)、琉球列島(内間 1994:p.236~)などにもある。一方、カラの接続助詞としては「正に何々だから」とだけで、劣勢の模様である(湯沢 1955; 小林千草 1973 でも他の形式と比べ稀)。サカイ類も理由を表す「読むまいさかひに」(p.136)があるが、「実名詞」もあり(p.70)、まだ体言サカイ+ニの意識も察知されるか。ニも理由の接続助詞として見える。デは「物を申すでくたびれた」(p.392)が載る。ケン類に関係する記述は見られないが、後述の提案に関係する「ケ(故)」を調べると『日葡辞書』に「ケ(故)」が「ある事の理由、あるいは、わけ…卑語」とあり、他に中古の『竹取物語』『源氏物語』から中世にわたって散見される(以上『日本国語大辞典 第2版』『時代別国語大辞典 室町時代編』)。後述するように、これが中国以西のケン類の出自ではないかと思う。

また、キリシタン版『エソボ物語』では、ニは順接も逆接もあって「あまりくたびれたに、この薪を合力して余が肩にお担げあれ」(理由, p.501), 「いかに人々、我には罪もないに、なぜに殺さうとはさせらるぞ」(逆接, p.474)のように文脈依存性が高い。カラの理由の用法も「あまたの人はわが身に応ぜぬ楽しみを巧むから一旦その楽しみをも遂ぐれども、…」(p.488)があるが、まだ起点の意味の格助詞例と隣接するよう感じられる。ホドニ・ヨッテ類の勢力にも及ばない。

これが近世に入るとホドニに代わりヨッテ類が盛行する。その勢力に押されてか、サカイ類は『片言』(巻2)、近世戯作類、上方雑俳類に散見されるが盛んでない。

デも盛んでなく、前件・後件を因果関係で結ぶ力は弱く、「そちが聞ふで気が付た」(『ひらかな盛衰記』:p.133)など理由の意味は文脈依存性が高いが、「七十の賀を祝ふてくれたで、今日の祝ひはさらりと仕廻た」(『菅原伝授手習鑑』:p.113)などいくらかはあり、格助詞デの根拠や理由をあらわす用法からの発展と考えられる。また、少例からの判断であるが、文末は叙述文が中心である。デの例は少ないが、後のノデの発達を考えると、口語的な世界ではデがかなり使われたのではないか。

接続助詞カラの理由の用法も「案ずることはちつともない、外には人も知らぬから、一先づ内へ去なしやんせ」(『袂白絞』:湯沢 1936 より)ともあるが、例は少ない。文末は主観的な命令表現であり、この点はすでに江戸語の表現とも共通する。ただ、近世前期の近松・西鶴のものにカラ・カラニ・テカラ・カラハなどある中で、次のようにテカラで継起的接続ないし逆接の例も少なくない(江戸語のテカラは時間的接続が中心、上方は事態的接続も多い)。

○はしつぼねの吉野に書かせたら、文見せらるゝにしてから、犬に伽羅聞すごとくひとつも埒はあかず、(『好色一代女』)

○ついたとて ふんでいてからつき米じや(上方・宝永2年、『雑俳語辞典』)
文脈依存性が高く、そのために多様な用法が発現するのであろう。

後期の洒落本類でも、「さる御屋舗から金が五百貫目下るからうけ取にゆかねばならんし」(『北川蜷殻』:p.343)と理由の用法が散見されるものの、依然として継起的接続ないし逆接的なテカラ形の「ちつと花やかなわつさりとしたはなしを聞しんか/なんのおまへがいひだしておいてから」(『北川蜷殻』:p.350), 「ソレ、うまひ事してからおれになぜしらさぬ」(『酔のすじ書』:

p.133) なども多く、理由の用法はその限られた一面である。ヨッテ、ホドニは量的にもカラをはるかに凌ぐ。そしてサカイが幕末から明治期にようやく勢力が強くなる。ヨッテとの交替期は明治中期以降のようである(金沢 1998)。

なお、カラについては、GAJで東西の分布差が問題であった。それに関連して、理由の接続助詞カラは、体言カラの変化も否定できないが、格助詞カラの「起点」などの意味を經由して成る道筋が考えられる。その格助詞カラは中世後半に古くからあるヨリと交替しつつあった。そこで格助詞カラの伸張の模様をカラとヨリの比率で見ておく。

『エソボ物語』では、出現環境が同じと思われる文脈でカラ65例、ヨリ45例で、ヨリは地の文に多いものの、なお会話例もある。『おあむ物語』ではヨリ数例のみ、近松門左衛門の作品のいくつかを見ると、『曾根崎心中』カラ8対ヨリ13、『冥途の飛脚』カラ38対ヨリ15、『心中宵庚申』カラ29対ヨリ17、『博多小女郎波枕』カラ37対ヨリ8といった状況で、湯沢(1936:p.492)で「当期の一般社会では、『から』を用いるのが普通であった様である」とするものの、ヨリもやや残る。

3.2. 江戸語

吉井(1977)によれば、近世初期は上方系のヨッテ・ホドニなど、その後カラが中心となり、続いて末期にノデが客観的な文末表現の部分から発達しはじめるとしている。カラ対ノデの表現性は、今日のGAJの33図対37図によく対応している。

カラは確かに広い層に使用され、文末表現も客観から主観の表現に亘り、早くに定着したことを感じさせる。近世後期江戸の洒落本・滑稽本をかなり調査してもカラ単独形が圧倒的で、これにテカラが混じる程度、作品によってニヨッテ・ユエも加わる状況である。単独の接続助詞カラはすべて理由の用法、テカラはまず時間的な順を表し、上方とはカラ類の形式・用法がかなり違う。

このカラの陰に隠れてあまり注意されていないがニ・デも散見され、デはノデの基盤になったと考えられる。ニは逆接もあり、文末の終助詞的傾向もつよい。ノデ自体はまだ少ない。

○今日はこなたが能く流して呉たでさつぱり仕ました(『浮世風呂』:p.121)

○よいかね。能温らぬと跡で寒いによ。私に構つて風を引てはならぬ。(『浮世風呂』:p.121)

○さんや、でへぶいぶるによ。ちつとさしくべればいい。(『通言総籙』:p.366)

なお、田中(2002)はこのデ・ノデは改まった言葉としての特徴があり、「少なくとも天保期までの江戸語では、武家や比較的上層の町人層に、その使用が限られ、丁寧なものの言いの場合に使われる傾向がある」(p.470)とし、GAJ33図を参考に「東海地方の武家や商家の進出によって、江戸ことばにもたらされたものの一つと認めても、そう不自然なことではない」(p.473)とする。

しかし本稿は、デが近畿の東西、また九州南西部にも分布する広さをもつことから、文献での発現は少ないもののかつて近畿一帯にもデが使用され、これが江戸にも伝播し、東国のカラと位相的に共存し、やがてノデが生まれて今日に至った可能性が高く、東海地方の方言との直接的な関係は弱いと考える。

田中(1993)には江戸語のデの詳細があげられている。そのうち明治以降を除く13例の後件の表現を点検すると、叙述文が中心であることが注意される。「よひくせがよふござる」「おもしろへ」「両為さ」「面白いのだが…」など事実認識や評価にかかわる叙述文が10、「舌をまいて…ふくらませるで剃すりよくはないか」の質問1、「深え馴染ふけの中だおもひだで思出おもひだして歎なげきが増して母様かきさまが泣くべえ」「呼よんだで、それできつくふさぐたらう」の推量2（ただし共に末期の天保）となる。続くノデの例文5例（例外とする『東海道中膝栗毛』は除く）を見ても、質問・推量が各1例含まれるが、叙述文に強く傾き、意志・依頼・命令などの表現は現れにくい。

これは後述の近世期尾張のデが広い階層に常用され、文末表現も客観的・主観的表現にわたるとかなり異なるのである。

3.3. 東国の模様

中世の洞門抄物でサカイがあり（『人天眼目抄』）、金田(1976)は中世後期以降の洞門抄物におけるその体言から接続助詞までの広い用法を紹介している。これらの例はサカイが必然確定（原因・理由）の用法に収斂する前の様相も含まれ、貴重である。そして、庶民に密着した言語ではないとしながらも、禅僧たちの地方展開に伴って信州・越後・北関東・甲斐などにも行われたもの、『雑兵物語』のサカイもこの類という。今この点の検証は出来ないが、それならかなり広いサカイ類があり、やがて日本海側を除きカラに圧倒されたのであろう。

なお、カラの東西差にかかわって、格助詞のカラとヨリの比率は、近世前期江戸語に適当な資料はないが、『雑兵物語』ではカラ43対ヨリ5であり、先引の近松など上方前期の諸作品よりカラの頻度ははるかに高い。後期にカラがさらに盛行することは言うまでもない。

3.4. 近世期各地の方言

以下、各地の模様を資料の得られる限り点綴する。

奥州・関東 南部の『御国通詞』に「御国辞」のサカイデがあり、かつては内陸部まであったのであろう。吉川(1955)は、奥州厨川の儒者、木内以慎『寒山詩抄』（承応元年、『国書総目録』によれば「売立目録」に出るのみ。彦坂未見）にカラもかなり使用され、一方「上方に在っては時代を下っても著しい進出を見せない」とする。東国では硬い文体でも早くカラが使用され、東西差が大きいことに注意したい。確かに近世後期の京都・小浜あたりの崎門派の講義録（小浜市立図書館酒井家文庫所蔵の崎門派のもの）はユエ・ホド・ニヨッテ類が主流でカラは少なくサカイ類はまず皆無。一方、東部地域では、関東周辺の講述（金田1985）にも、平田篤胤の書簡にも原因・理由のカラが多く、広い使用層と文体の領域に亘っていることが知られる。

庄内地方 齊藤(1965)によれば、郷土本類に「さかへ・すかい」他のサカイ類が多用されている由。「そだすけ…外の女郎など買ねでくなせや」（『苦界船乗合唄』:p.385）と、主観的帰結句にも使用されている。北条(1975)は同資料にある「ほどへ」をホドニとする。

越後新発田 金田(1983)・佐藤武義(1988)の紹介した近世末新発田藩士の方言調の講義録にはカラが主として使用され、デもある。類似の文献から探せば「当りマイヲヤツテモハヤラヌカラ

ソコテサマ／＼ナ拵デ人ヲダマス也」(『鞭策録会割記』:4丁ウ)、「親ノ機嫌ヲヨクシタクテナラヌデスルノハ諭於義ダ」(『井東先生学談』:42丁オ)などがある。GAJの新潟県北部沿岸地域はサカイ類・カラが強く、ノデ・デも現れる。講義録数点の調査ではサカイ類が出ない。教養層の言葉として避けられたのかと思う。

越中高岡 越中高岡連「狐乃茶袋」(雑俳,安政4年)に「氣遣ひもない 款冬の花の身分と成たから」(49丁ウ)、「わしがいふ事を反古にしやるさかへ 十分の利が五分も届かぬ」(38丁ウ)と、カラ・サカイの両方が見えている。GAJの富山県の模様に似て信憑性があるか。

信越境の秋山郷 鈴木牧之『秋山記行』は文語で書かれているが、土地人の文言も混じり、ここにはカラだけがよく現れる。

○此主は山田助三郎と申て、山田の惣本家、段々商人杯あちんどなんずちが来て願ふにも見せ申さぬ、さりながら、上田から遥々ちん来なつたから、己うら懇意の事故、終走り行と云ふて、家翁へだしは徒足で其家へ行、暫ありて帰り申にハ… (p.74)

一方、説明文の理由表現はユエが多く、時にニ(逆接もあり)、ニヨツテが見えるが、どこまで方言の反映か疑問である。馬瀬(1982)の指摘する特徴によってこの資料を見ると、「商人」を「あちんど」などキ>チ例が頻用されて方言色も強い。GAJの様相よりもカラを重視した見方が必要か。とすれば、カラが先行したことを示唆する例となるか。

駿河・遠州近辺 近世後期『東海道中膝栗毛』では、ニが三島市近辺から西に出始める。カラも駿河東部で出るのはGAJと通り当然として、遠州西部近辺でも現れるのは疑問。『阿倍川の流』にニもわずかにある。カラを除いてかなり今日と通じる点がある。

尾張近辺 彦坂(1997)に述べたように近世後期郷土本類にニ・デが多用され、ともに接続助詞・終助詞として主観的表現の後件文もとる。今日の模様は彦坂(1991)で愛知県周辺のデの中にニが遺存する形を報告した。GAJ33図と比較すると、ニの衰退が顕著である。

さて、江戸語のデ・ノデは後件が叙述文に片寄ったが、尾張では次のように広い表現が現れる。

○叙述—ねつからマア船がぐらつくで、こぼれてどふもなりません(『春秋洒士伝』:41丁ウ)

○依頼—己が身はどふでもゑいで、どふぞ私が体にかへてなりとも親の病気をなほして下され(『刑部家旧蔵如来教説教記録』:文化2年5月14日説教)

また、デは、今日のカラのように文末に位置することもできる。

○そうでやあらアず、高がこそ(小僧)あがりでやでなんし(『女楽巻』:p.339)

ニは文末が主観的表現のみ、倒置用法も多く、終助詞用法もある。

○命令—「いつでも能よいに往ゆけやう」と言はしやれ(『刑部家旧蔵如来教説教記録』:文化2年5月16日説教)

○終助詞的—そんならおけ、大丸やが来たらあつらへてやるに。そのかわりおれが帰った後で間男でもする事はならんがゑいか(『困多好鬻』:p.306)

また、「おけ(「止せ」の意味)と言うにつつきやあがる」(『舞意鈔』:p.233)と逆接もあって、文脈依存性が高い。国語史でのニの用法とよく通う。

次のようにデとニが共に出る例は、デが客観的表現、ニが主観的表現寄りの文末表現をとる区分のあることをよく感じさせる。

○御隠居さまへ、「去年御前様に御約束申上^レ升たが、又一本（靈芝が）はへて居升た^レで、私がとつて参り升た^レに、是は私に下されへ」と申せば（『御由緒』（如来教関係の書類）：p.349）

こうした用法と勢力から、ニが古くて、文末は主観性に富み、遺存的なもの、次第にデが隆盛してニを駆逐し、文表現として主観性に富む領域にまで進出してきた変化があったと思われる。GAJではこのデに駆逐されてニが東部に追いやられている変化が見られる。

三河から遠州を舞台とする『滑稽大人一九之記行』にもこうしたデ・ニが多用され、また推量系助動詞マイを受けるデの例もある。資料は少ないが、GAJのニ・デに通う分布の広さを示唆するものであろう。

○ト此聞壺人のをやぢ、ふんべつらしきが、こゝに居合せ〔をやぢ〕お役人さまへあげさせるのものを我党^{わがとう}の煮てくひおるやうにごたらくさもなら^レまいでなア（『滑稽大人一九之記行』下：15丁）

GAJのデは三重県から中部地方に広く、また33図は勿論、37図にも密度はやや低くなるが現れる点からして、近世期でも同じ地域で尾張地方の表現性に似た用法があったと推定しても無理はないと思う。そして、その状況は上記の模様から推して近世初期あたりには成っていたことも想定できる。江戸語のデとの表現差は大きい。

以下の地域は前稿で触れてあるので、多少の修正をしながら簡単に記述する。

伊勢地方 彦坂(1983)に述べたように近世中・後期にニとデが多用されて、表現性も尾張と共通する。いくらかヨッテ類も出るが、サカイはない。

美濃地方 伝承狂言『能郷猿楽狂言詞章』は伝承元の上方語詞章を引き継ぐ様相であるが、デが「己が先に入つた^レで婿じやわい」（「恵比須毘沙門」：p.568）など複数見えて、GAJと共通する。「虎明本」の文言とは相違して、方言形である。

中国地方 中世に行われた「田植唄」が伝わる。使用テキスト（友久編『校本田植草紙』）の例を整理すると、次のような状況である。

まず、ケニが1例あり、GAJのケン類の祖形に違いない（すでに山内 1989 の指摘あり）。

○いねがよいけにたわらをあめやせんとか（p.114）

校異を検すると複数本文に出て、『物類称呼』『石見にてケニ、因幡にてケン』（巻5）の記述と通い、GAJの様相とも通う。かなり主観的表現までを担当している。

ニもよく拾え、用法は先の尾張・伊勢の模様と酷似し、逆接もある。ホドニもいくらかある。ただ、デは痕跡もないのが気になる。カラも「お出居からよ出居からよここに寝る^レからよ」（p.301）といくらかある。

問題はその言語の時代性である。基本的に歌謡の成立は中世期ながら、伝承と転写を経て近世期の変容も混在すると見るのが無難であろう。現存する写本は近世期を遡るものはないとのこと。しかし、ケン類・ホドニ・ニ、理由に近いカラの存在は、今は消えた諸形式も示唆している

ように思う。

この他、近松作品には九州・長崎人のケンがある（「上方しゆは気がよかけん、こがいなことは有まいと」『博多小女郎波枕』:p.27）。また、米谷(2004)紹介の安永期『石見方言茶話』（法話）には、

○硬^{ゴウロ}ノワルイ道^{ミチ}ダケエ…タイテイ^エナ御苦勞^{ゴクラフンチキア}デハゴザリマスマイ^ア（2丁）

および「ケニ」の例が現れる。

「田植唄」の時期や近松の例が方言臭を利用している点、また耳近い法話の例などを参考にすると、ケン類はケニ・ケンとして近世初期前後まで廻り、広い分布をもっていた模様。出自の問題と関わっては、上方のサカイの盛期より早い点も注意される。

四国地方 諸星(1997)は、幕末の武市瑞山文書にキニが多用されていることを指摘する。他に坂本龍馬書簡にもキニが複数見られる。

○清二郎一人でさへ此頃のしゆつぼんハよほどはなぐすなれども、男であるきにまあをさまりハ付申べし（「姉への手紙」:p.307）

理由を表す接続助詞カラもある。

○近日私しが国にかへる時、後藤庄次郎へも申候て、蒸気船より長崎へ御つれ申候。…私しハ妻一人にて留守の時に実ニこまり候からいやでも乙様お近日私し直々に蒸気船より御とも致し候。（「姉への手紙」:p.305）

GAJでは四国にカラはまず見られず、このカラを方言とすかどうか難しいが、格助詞用法の転用として有り得たか。なお、ヨリもあり、『日本大文典』の「舟より渡った」（p.406）に似る。

九州地方 佐賀滑稽本『滑稽洒落一寸見た夢物語』（慶応3年序）や近世末期『伊勢道中不案内記』（佐賀人の伊勢旅行記）には、ケニ（ケヘニ表記）・ケンのケン類がよく出てくる。

○ハア私ハ昨日からおこいチウもん振ふておるけん、今もふりイおるケヘニお助けンサアイテくいなれんかん（『滑稽洒落一寸見た夢物語』:p.264）

ケニはGAJのケン類の古形と考えられ、帰結句には主観的表現もある。

やはり米谷(2004)紹介の安永期『肥後方言茶談』（法話、『石見方言茶話』と合綴）にも、

○チツタア後生ニモナメフケニ近処^エの衆モツレダツテ…往^{イカウ}テ^エ（18丁）

がある。やや早い時期のものとして注意される。

中国・四国・九州のケン類の表現は、GAJでも33・37図の両方に現れ、中国・土佐・近松作品・佐賀滑稽本類のケン類も後件に推量、勧誘・依頼・命令といった主観的表現もとっている。

18世紀前半の薩摩方言を反映すると見られるゴンザ関連資料は、村山(1965, 1985)で見ても、デは見出しにくい。しかし、近世末期『大和口上言葉集』は、琉球での薩摩弁の参考のためと言い、薩摩弁を基調とする近世末期資料とのことであるが、デが多く、やはり後件は叙述文だけでなく主観的な表現も応じている。

○そのをなごかいふにハ、其不洗包は肝要なもんが入ちよれもうす^デ、とふか内ハ御見やつち^{タマン}給てなど…（p.293）

沖縄の模様 『沖縄古語大辞典』で、接続助詞カラの用法は理由以外にも広い（GAJの助詞図

にもカラはよく出る)。モノ・コト・デ・ニ類の理由の言い方もある。モノ・モン(デ)は「原因・理由の詠嘆的表示と先行・後行内容の結合」(p.272)とあるが、単純接続もある。格助詞カラにはロドリゲス『日本大文典』の説明のような広い用法もある。これらの点は、今日の模様を主とする内間(1994)の説明でも類似の記述が多い。



図3 近世期前後の様相点綴

以上、不十分ながら近世期を主とする文献を見た。これを図3とした。すでに今日的な様相のほとんどが準備されていたことが知られる。しかし、古態のニは尾張・伊勢そして中国にも現れ、ホドニは庄内・中国にあった可能性があり、ケン類の古例は近世の比較的早い時期に中国や長崎にある。理由のカラの東西差も見えた。デについては、江戸語・上方語と東海・九州のそれとに叙述表現の文末をとるものと意志・命令といった主観性の強い文末表現をとるものと傾向差が見られた。中国以西のケン類も近世期に主観性の強い表現にも対応したものであった。

4. 今日の分布と方言文献とによる歴史の推定

図1・2と図3の時間差のある分布を比較して、その総合をはかる。

文献側からは、諸形式の地域的変化や絶対年代について大まかな手がかりが得られよう。

表現法の点では、条件法として前件と後件との関係が問題となる。小林千草(1973,1977)、吉

井(1977)らの京畿、江戸でのホドニ→ヨッテ→サカイ、カラ→ノデの発生・伸張の研究を見ると、概して旧形式は依頼・命令といった主観的表現に残りやすく、新形式は叙述的表現から進出するように思う。こうした表現性は、原理的には、山口堯二(1996:p.201)に「(推量・意思、命令など志向性に富む関係表示は)現実的な事態の原因理由表示の用法を基礎とする、その発展として可能になる」との指摘がある。私に言い換えれば、事実性に寄り掛かり前件句と後件句を単に継起的・即時的に結びつける段階から、次第に前件と後件との因果関係の認識へ向かう段階、さらに時空を超えた因果的事態の想定が可能となり、未来性・志向性に富む主観的な表現領域の句の次元をも結合できるようになったと言えるのではないか。

以上の点を考えると、個別形式のとり文表現も事象的・叙述的表現レベルから次第に主観的傾向の表現へと拡張する可能性が考えられ、接続助詞の承接法も連体形から終止形に転化し、さらに終助詞化の可能性をもつ。そして中央語など表現性の敏感な地域では、よくその隙間を新しい表現が埋めるといふ繰り返しがあつたと考えられよう。

また、発展的な問題としては、他の条件法形式に比べて必然確定(原因・理由)の形式は格段に多く、変化も激しい。その理由も知りたいところである。

4.1. 京畿からの放射と方言史的側面

先述した京畿からの放射順に見ると、まず、〈バ〉は上代以前から広がり、京畿での衰退はホドニなど新興形が出る中世中頃、消滅は中世末以降の仮定用法への変化の時であろう。第3節で見た奥州や中国地方の文献にも理由の〈バ〉は無く、この辺りも近世前期頃には衰退していたろう。文表現として客観/主観表現の区分については明らかでないが、〈バ〉が優勢の時代には他の競合形は少なく、さして見られなかったかと思う。

次はカラであろう。格助詞カラは全国に行き渡り、ロドリゲス『日本大文典』の指摘する多彩な用法をもっていたはず。しかし、京畿では規範意識もあってヨリからカラに交替する時期も遅れ、今日の西日本での多彩な用法から見ても、カラの接続助詞化が十分伸張しない内に分析的表現のホドニ他が台頭したのであろう。一方、書記言語に基づく規範意識が乏しく話し言葉主体の東日本では、格助詞カラの伸張が容易であつたと考えられる。これがカラの東西差の大きな要因と考える。

前述した近世期前後の上方と関東のヨリ対カラの比率などから逆推すると、このカラが東日本ではおそらく中世末期ころには定着し、「起点」などの意味から容易に原因・理由の接続助詞となり、〈バ〉の後を襲つたと推測する。その後、地理的条件からも江戸を除き複数語形の波及は少なかったか、カラが後続形式を排除したのであろう。〈バ〉からカラの交替期には文の表現に主観/客観表現の区分もあつたかもしれないが、よく分からない。

ただ、カラの上のような接続助詞化は比較的容易と思われ、各地独自に理由の用法が発達したことも考えられる。特に散在する西日本のカラは、統一的な分布解釈が出来ない点で、その可能性が高いと思う。山口県・九州東南部などのカラは土着性が強い模様で、このような独自の発達があつたことが想定される。中国「田植唄」・土佐のカラもこうしたものの片鱗ではないか。こ

の点で、冒頭で述べたカラの放射順の時期や位置も弾力的に考えるべきと思われ、理由の用法化の経緯が東西で異なると同時に、特に西日本で個別地域の発達の可能性が残る。

こう考えても、九州南部の、鹿児島県側はデ・宮崎県側はカラの分布差の説明は難しい。憶測の域を出ないが、いま考えられることとして、これにはやはり格助詞カラの多彩な用法が関係したのではないか。先引の福島などの指摘によれば、文例により差はあるもののカラの多彩な用法は山形県・新潟県・九州の西半地域、沖縄などにあり、ここに原因・理由のカラが出にくい。カラの多彩な用法がこれら周辺地域に残りやすく、そのため用法の一部の「起点」などが発達して原因・理由の接続助詞となる可能性が相対的に低まったと考えてみる。特に、ロドリゲス『日本大文典』の指摘する例に通うGAJ29図「船で来た」、他に27図「犬に追いかけられた」でのカラは九州南西部に多い。『九州方言の基礎的研究』地図49「手段」と51「順接」他でも、デとカラが相補的傾向を示しているように思われる。こうした要因で理由のカラの発達が遅れ、九州西北部には中国地方からのケン類が延びる下地ができ、鹿児島県ではデの方が定着した（ここにケン類はまだ届いていない）という憶測である。東北地方日本海側は、しかし、古いカラ・カラニが散見されて、この方向での解決は難しく、なお考えてみたい。

沖縄県でカラの理由の接続助詞化がさらに弱いのは、カラの用法が特に多彩なうえ、理由の〈バ〉も残存し、加えて中央部で体言クトゥの理由化が発達したために違いない。

続いてニは、国語史では中古にはあり、中国（「田植唄」）・尾張・江戸の文献から推して、中世の遅くない時期にはこれらの地方に伝播し、さらにGAJその他の痕跡からは九州にも到達したと考える。しかし文脈依存性のためであろう、西日本では他の語形に淘汰され、東日本では中部地方に先行したカラと後続のデに挟まれた形で遺存している。その他の地域では逆接の接続助詞や終助詞として残り、やがて近世後期に江戸や上方で逆接形ノニが生まれて、未分化な用法のニは衰退した。

デは、国語史での成立は中世初期頃ニテ>デ（『平家物語』等）による格助詞からの転化。京畿から西日本一帯、また飛び火的ではあろうが江戸付近にまで届いたのは確実である。以後、文脈依存性のためでもあろう、近畿中央では新興形に消され、その周辺部やまた中部地方のニの西側に遺存する形となった。しかし、上方や江戸のデは文末に客観的表現が多いのに対し、九州南西部も含めて今日デのある地域は33図の主観的表現にも浸透している。この点は地域独自の用法拡張があったと思われる。江戸でデを基盤としたノデが連体形承接であるのに対し、これらは終止形承接である（鹿児島県付近は終止・連体形がジャッであるが、勿論、終止用法でもある）。このデの用法拡張は近世尾張でデが先行するニを圧倒した模様も参考になる。関東以北では格助詞性が強く、浸透していない。

その後、京畿では中世にホドニ・ヨツテの類、さらに近世末以降にサカイ類へと変化した。個々の形式のとり文表現も初めは客観的表現から次第に主観的表現へと拡張を遂げ、複数形式に表現区分があった模様である。その伝播時期と範囲は、西日本では中国・四国地方のケンの出自認定と関わって難しいが、少なくとも近畿一円から東北日本海側まで伝播したことは確実である。なお、東部のサカイの勢力形成は、金田(1976)のように洞門の影響を考える必要があるかも

知れないが、いまその検証は困難である。

こうした中で、近世末期には江戸・上方でノデが発生し、中部地方のモンデも含め、中央部で表現区分を発生させた。これらは論理的表現に関わって個別に都市部で発生したと推測した。

4.2. サカイとケン類

最後にこの2形式を考えるが、その想定される出自次第で他の形式の位置づけも変動することになる。

まず、今まで指摘は少ないが、サカイ一般はかなり広い用法と分布を見せる点に注意したい。GAJ 諸図で見られる地域以外のサカイ類を『日本方言大辞典』その他で探れば、(1)原因・理由として、近世文献では、『尾張方言』、尾張の熱田『宮訛言葉の掃溜』、『雑兵物語』、(2)同じく、近代の資料で神奈川県三浦郡、信州諏訪、三重県志摩郡・度会郡、鹿児島県薩摩南部、伊豆諸島神津島、長野県更級郡、(3)偶然確定条件～トサカイ形で静岡県、愛知県碧海郡（両地域は～トサイガ形もあり）、また、『全国方言資料』熊本県上益城郡に「ワシトコヘンノ ヒレー トッテミットサカー…（わたしのところあたりを 例に とってみるといって、…）」(6:p.291) などもあり、またGAJ169図「お前が行くとだめになりそうだ」で新潟県といった模様。別に(4)上村(1951)に順接・逆接を含んで鹿児島県にサケ・サケンといった状況である。先引の小林好日(1950)は、(1)が山梨県や九州にも存在した可能性があるとする。

これは、金田(1976)で多様な用法が示されたように、体言「境」からの変化過程に必ず、理由の接続助詞に収斂しない時期の模様が現れていると考える。体言サカイが各地に伝播し、その地域の事情に即して受容されたのであろう。(3)は吉町(1976)に偶然確定条件～トサイガがサカイと関連する可能性を説くもの。『静岡県方言辞典』、『碧海郡誌』（愛知県）にはトサイガも同時に掲載され、その可能性がある。(4)で上村は理由の用法だけでないことを困惑気味に考察しているが、理由に収斂しない初期のサカイなら矛盾せず、その中に理由の用法も個別に生じたのであろう。地方語誌報告の域を出なかった地域も含め、かつての多様な用法のサカイの分布が想定できる。

すると、GAJの京畿を中心とするサカイ類は、こうした用法が理由の用法に収斂されたもの、理由の接続助詞としてのサカイは中世に兆し（ロドリゲス『日本大文典』）、近世前期にも上方で散見されるが、隆盛は早くても近世末期以降であった。一方、上の各地のサカイ類は後に他の形式に淘汰され、独自に理由の用法が生まれたとしても、関東ではカラ、中部ではニ・デ、中国以西はケン類などに代わられたのであろう。このように考えると、体言「境」の伝播と京畿での理由のサカイの放射順とをいくらか区別してかかる必要があるように思われる。

ケン類はどうであろうか。まずケン類をカラ類の変化と見る説（北条 1973, 1975; 佐藤亮一 1992）は東西の分布バランスがよく、北条説が変化途中に想定するカリニ・カイニは宮崎県にあって現実的である。難点はカイニからケー(ニ)は、中国地方の連母音の融合が東部ではエァ(ε)、西部ではアーで（『中国四国近畿九州方言状態の方言地理学的研究』図4）整合しないこと、またテカラ形などの継起的用法が盛んで（『瀬戸内海言語図巻』32図・75図等）、理由の言い

方だけケン類に変わったとする説明が難しいことである。山口県・宮崎県などに定着したカラが極めて広域なケン類に隣接して分布するのも不自然である。

小林賢次(1992)が慎重に可能性の一つとするサカイ(ニ)も、サカイ類が北陸以東に伝播したのなら西日本にあるのも当然で、サカイニ>ハカイニ>カイニ>ケニが想定される。しかし、カラと同じ連母音の音価の問題が起こること、北陸以東のサカイ類は語頭にサ・ハを残すことが多いのに対し、中国以西のケン類とするものにはこれがまず皆無、むしろケン類から離れデの地域である鹿児島の子ケ・サケン(上村 1951)の方が近く(GAJの関連図にはすでにこの形式は出ない)、それならなぜここまでケン類域にならなかったか疑問となる。また、上記(3)偶然確定条件、熊本県のサカイ類の例は理由のケン類の区域であり、両者は別物である可能性が高い。

京畿のサカイ類は長く伏在する地位に甘んじた模様であるが、中国地方「田植唄」や近松作品、また石見・肥後の法話に出るケン類からは、理由の用法が遅くとも近世初期には中国から九州の広域にあったと考えた。これをサカイの中央に先行する地方的変化との想定も出来るが、上述の問題が解決されず、やはりサカイ説は採りにくい。近畿西部のケン類の研究からケレバ説をとる神部(2003)もあるが、ケンの分布地域全体にわたって適用できるか疑問もある。

そこで難点もあるが、ここでは「ケ(故) + 格助詞ニ」由来説を採りたい。体言ケ(「故」)は中古の『竹取物語』『源氏物語』『栄華物語』などにあり、中世では『後奈良院何曾』『日葡辞書』『捷解新語』などにある(以上、『時代別国語大辞典 室町時代編』参照)。

○思し浮かれにし心、しづまりがたう思さる、けにや、少しうちまどろみ給ふ夢には…
(『源氏物語』1:p.331)

○無羨におもわしらるな。これも酒のけでこそ御ざれ(『捷解新語』6:9丁ウ、但し『三本対照 捷解新語』の釈文は「気で」、上記『時代別国語大辞典 室町時代編』では「故」)

「ケ(故)」は近畿では時間的にも理由のサカイ類に先立ち、形式的にはそのままケニ・ケンとなる。『日葡辞書』で「卑語」とあるのは、古態となった時期の評価とみれば矛盾はない。『大言海』・九州言語学会(1969, 糸井寛一執筆部分)・神鳥(1998)・岸江(2000)もこの説である。ただし、岸江が参考として北陸の類似語形を指摘し周囲分布を想定する以外、理由は述べられず、カラ説・サカイ説についての検討も行われてはいない。

この目で見ると「ケ(故)」は、大槻玄沢が天明5年、長崎遊学時『磐水先生随筆』に方言を書きとどめた「ソンケンデハ ソレ故ニナリ」(p.73)があり、原田(1953)で近世末期熊本『菊池俗言考』の「それけに」が今日も熊本弁にあるとする。これらがケン類の分布域に入ること、積極的な根拠にはならないがGAJ36・37図をまとめると長崎県に「子供ケン」のあること、また『日本方言大辞典』、藤原与一『日本語方言辞書』、『日本国語大辞典 第2版』等を検すると、西日本以外に次のような東部日本海側の例もあることが注意される。

○こーいうわけだけね面白ないがや(『越中方言集』, 1897年)

○暑いきに少し休め(『佐渡方言辞典』, 1974年)

他にケ(新潟市)・ケデ(富山)・ゲテ(山形県北・南村山郡)などの記載があり、上記辞典類ではサカイ類と別扱いである。GAJ35図にも北陸にケネ・ケニがある。これらと西日本の例とが同

じケン類とすれば、東西に周囲の分布が現れ、かつて体言ケ（故）が京畿から東西に伝播したことが想定されよう。ケ（故）は『日葡辞書』の記述からは京畿では中世末には衰退していたのではないか。GAJの北陸のケニ・ケン類は近畿からのサカイ類などの伝播によって衰え、これに対して西日本ではニ・デやホドニ類も伝播したが、体言的ケが何らかの事情から中国地方で隆盛し、文脈依存性の強いデを駆逐し、後に続く新興のヨッテ類・サカイ類の侵入を阻んだ図式を想定する。体言の接続助詞化はホド・トコロなど類例もあり、ケニはまたこれらと同じ分析的表現の類であった。

難点は、中央も含めて文献のケは体言の用法に限られ、明確な接続助詞の例がないこと、中国以西でケが温存され接続助詞化してデ・ホドニを駆逐する過程が実証できないこと、東部のケン類と見たものもサカイ類からの変異でないと言い切れないことなどである。

5. 分布展開の模様と特徴

以上の検討から、まずは大きくは原因・理由の接続助詞類の分布が西高東低型であることがわかる。その分布経緯を含んだ各地方言史としては、次のような点が指摘できよう。

近畿での語形の転換が最も多い。中国地方も多いが先の放射順のケニ止まり、かつケニの方言的な伸張がデを分断する形で中国～九州北部の地域的まとまりを持つに至ったと推定される。九州南部は西部がデ、東部がカラ止まりで、その分布には藩域の影響があり、格助詞カラのかつての多彩な用法が絡んだことも憶測された。中部地方はデ止まりながら、先行する東部のカラに阻まれたニ、それを追撃するデの模様が見られた。東日本はカラ止まりながら、格助詞カラの変化の東西差がからみ、東部で早く強い勢力を張って以後、日本海側を除き、他の語形を寄せ付けなかったようである。また、中部・近畿周辺部・鹿児島県のデは国語史での京畿・江戸のデが叙述的文末の表現傾向が強いのに対し、主観的表現にまで伸張したことも推定された。これらの地方的語形は、中央からの伝播に対抗することもあったかと想像される。第2節で想定した京畿からの放射順と各地方言史での個別語形の変化とは、ある程度区別して捉える必要があることになろう。

表現区分の点では、近世末期以降、江戸・上方で論理的な表現のノデを主とする準体助詞型が発達し、モノ型も恐らく同時期に尾張付近からおこり、今日、本州の中央地域を中心に個別に表現区分が生じている。しかし、先述のように語形交替の多かった上方では過去にも同種の区分が指摘され、江戸でも後期には想定され、この区分は今日のみのことではない。ここでは、中央部や都市部でこうした表現性を求める動向のあった点が重要であると思う。地方部では、恐らく過去を含めて、これが顕著には見えないと思われる。

これに関連して、国語史の領域では近代語への過程でいわゆる分析的傾向が顕著になったことが指摘されている。今まで見てきた方言分野での語形交替や表現区分の発生も分析的傾向への変化である。しかし、それがよく見られたのは中央地域にほぼ限られ、地方にはニ・デなど文脈依存性の高い形式がなお使用されている。さらに、近畿その他でもサカイ+ニがサカイ・サケなど、ケニがケ(一)・キ(一)など短縮形へと変わっている。この点、分析的表現も手ずれをおこ

せば消失し、新しい表現が分析化に参与することが繰り返されるのではないか。一方、地方では必ずしも分析化が志向されず、放射順と西高東低型の関連でみると語形交替は緩慢で独自の変化も想定された。

今後の課題でもあるが、理由の条件表現は、例えばGAJで見える仮定条件法などと比べて特に語形交替が顕著であり、その反映として地理的変異も大きい。思うに、因果関係の把握は前件と後件とを意味的につよく拘束させる必要があり、関係付けを示す形式の必要度が特に高いのではないか。そしてそれは単純な接続や時間的接続の形式が転用されて役割を果たすように思われるが、手ずれを起こすのも早く、新たな形式をさらに必要とさせたのであろう。これが多彩さの理由と思われる。この点は他の条件法との比較によってさらに確かめたい。

参考文献

- 愛宕八郎康隆(1992)「助詞から見た各地方言・九州方言―『カラ』から見て―」『日本語学』11-6, 236-238, 明治書院
- 上野智子(1979)「長崎県西彼杵半島方言の接続助詞『から』『けれども』について」『広島大学文学部紀要』39, 164-187, 広島大学文学部
- 内間直仁(1994)『琉球方言助詞と表現の研究』武蔵野書院
- 金沢裕之(1998)『近代大阪語変遷の研究』和泉書院
- 金田弘(1976)「接続辞『サカイ』考」『洞門抄物と国語研究』192-215, 桜楓社
- 金田弘(1983)「越後新発田藩儒井東信斎とその講述筆記」『国学院大学紀要』21, 1-48, 国学院大学
- 金田弘(1985)「後期江戸語教養層の言語資料『中庸筆記』をめぐって」平山輝男博士古稀記念会編『現代方言学の課題』3, 259-298, 明治書院
- 上村孝二(1951)「サケン稿」『国語学』6, 83-92, 国語学会
- 上村孝二(1998)『九州方言・南島方言の研究』秋山書店
- 神鳥武彦(1998)『広島県のことば(平山輝男編 日本のことばシリーズ34)』明治書院
- 神部宏泰(1992)『九州方言の表現論的研究』和泉書院
- 神部宏泰(2003)『近畿西部方言の生活語学的研究』和泉書院
- 岸江信介(2000)「徳島方言における理由を表す接続助詞の変容について」『徳川宗賢先生追悼論文集 20世紀フィールド言語学の軌跡』289-300, 変異理論研究会
- 九州方言学会(1969)『九州方言の基礎的研究』風間書房, 同改訂版(1991)
- 国広哲弥(1992)「『のだ』から『のに』・『ので』へ」カッテンブッシュ寛子他編『日本語研究と日本語教育』17-34, 名古屋大学出版会
- 小林賢次(1992)「原因・理由を表す接続助詞―分布と史の変遷―」『日本語学』11-6, 131-141, 明治書院(のち小林賢次 1996 所収)
- 小林賢次(1996)『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- 小林千草(1973)「中世口語における原因・理由を表す条件句」『国語学』94, 16-44, 国語学会
- 小林千草(1977)「近世上方語におけるサカイとその周辺」『近代語研究』5, 309-354, 近代語研究会
- 小林好日(1950)『方言語彙学』岩波書店
- 斉藤義七郎(1965)「江戸期方言資料としての庄内地方郷土本」『近代語研究』1, 285-306, 近代語研究会

- 佐藤武義(1988)「江戸時代の講義録の中の方言」加藤正信他『方言に生きる古語』81-112, 南雲堂
- 佐藤亮一(1992)「標準語・共通語の地理的背景」『日本語学』11-6, 46-58, 明治書院
- 田中章夫(1993)「因果関係を示す接続の『テ』『ノテ』の位相」『近代語研究』9, 257-279, 武蔵野書院
- 田中章夫(2002)『近代日本語の語彙と語法』東京堂出版
- 中本正智(1990)『日本列島言語史の研究』大修館書店
- 永野賢(1952)「『から』と『ので』とはどう違うか」『国語と国文学』29-2, 30-40, 至文堂
- 原口裕(1971)「『ノテ』の定着」『静岡女子大学国文研究』4, 31-44, 静岡女子大学国語国文学会
- 原口裕(1980)「準体助詞『ノ』の定着」『国語学』123, 47-57, 国語学会
- 原田芳起(1953)『熊本方言の研究』日本談義社
- 彦坂佳宣(1983)「近代伊勢方言史小考」『文学・語学』98, 74-85, 桜楓社
- 彦坂佳宣(1991)「東海西部地方の原因・理由表現」『名古屋・方言研究会会報』8, 23-34, 名古屋・方言研究会
- 彦坂佳宣(1997)『尾張近辺を主とする近世期方言の研究』和泉書院
- 彦坂佳宣(2000)「西部日本における原因・理由表現の分布と歴史」『論究日本文学』72, 1-16, 立命館大学文学部日本文学会
- 福島秩子(1992)「新潟方言の格助詞『カラ』の用法をめぐって」『日本語学』11-6, 81-93, 明治書院
- 北条忠雄(1973)「東北方言における理由表現の歴史」『日本方言研究会第17回発表原稿集』73-86, 日本方言研究会
- 北条忠雄(1975)「北海道と東北北部の方言」大石初太郎・上村幸雄編『方言と標準語』157-199, 筑摩書房
- 馬瀬良雄編(1982)『秋山郷のことばと暮らし』第一法規
- 村山七郎(1965)『漂流民の言語』吉川弘文館
- 村山七郎(1985)『日本版 新スラヴ日本語辞典』ナウカ
- 諸星美智直(1997)「武市瑞山文書から見た土佐藩士の言語について」『国語学』191, 1-13, 国語学会
- 安田章(1977)「助詞(2)」『岩波講座日本語7・文法II』291-358, 岩波書店
- 山内洋一郎(1989)『中世語論考』清文堂
- 山口堯二(1996)『日本語接続法史論』和泉書院
- 山口幸洋(1987)『静岡県の方言』静岡新聞社
- 湯沢幸吉郎(1955)『室町時代言語の研究』大岡山書店, 今は風間書房(1970)による。
- 湯沢幸吉郎(1936)『徳川時代言語の研究』刀江書院, 今は風間書房(1970)による。
- 吉井量人(1977)「近代東京語因果関係表現の通時的考察」『国語学』110, 19-36, 国語学会
- 吉川泰雄(1955)「接続助詞『から』と慣用語『からは』」『国語研究』3, 29-43, 国学院大学国語研究会
- 吉町義雄(1976)『九州のコトハ』双文社出版
- 米谷隆史(2004)「『(石見)方言茶話』と『肥後方言茶談』をめぐって」『近代語研究会219回発表資料』近代語研究会

調査資料

方言資料

国立国語研究所『方言文法全国地図 第1集・第4集』大蔵省印刷局, 1989・1999／藤原与一編『瀬戸内海言語図巻』東京大学出版会, 1974／藤原与一『中国四国近畿九州方言状態の方言地理学的研究』和泉書院, 1990／九州方言学会『九州方言の基礎的研究 改訂版』風間書房, 1991／日本放送協会編『全国方言資料』日本放送出版協会, 1966-1972

辞典類

徳川宗賢監修『日本方言大辞典』小学館, 1989／静岡県方言研究会・静岡大学方言研究会『図説静岡県方言辞典』吉見書店, 1987／静岡県師範学校・静岡県女子師範学校『静岡県方言辞典』吉見書店, 1910／碧海郡教育会『碧海郡誌』, 1916／『沖縄古語大辞典』角川書店, 1995／鈴木勝忠編『雑俳語辞典』東京堂出版, 1968／『新編大言海』富山房, 1982／松村明編『古典語現代語 助詞助動詞詳説』学燈社, 1969／『時代別国語大辞典 室町時代編』三省堂, 1985-2001／藤原与一『日本語方言辞書』東京堂出版, 1996／『日本国語大辞典 第2版』小学館, 2000-2002

文献資料

[京畿]『日葡辞書』-土井忠生・森田武・長南実編訳『日葡辞書:邦訳』岩波書店／ロドリゲス『日本大文典』-土井忠生訳註『日本大文典』三省堂／キリシタン版『エソポ物語』-大塚光信・来田隆編『エソポのハプラス:本文と総索引』清文堂出版／安原貞室『片言』-正宗敦夫校訂 日本古典全集(現代思潮社の復刻版による)／『おあむ物語』-中村通夫・湯澤幸吉郎校訂, 岩波文庫／『捷解新語』-『捷解新語』『三本対照 捷解新語』, 共に京都大学国文学会／『源氏物語』, 『平家物語』, 近松門左衛門『ひらかな盛衰記』『菅原伝授手習鑑』『博多小女郎波枕』-日本古典文学大系, 岩波書店／井原西鶴『好色一代女』, 近松門左衛門『曾根崎心中』『冥土の飛脚』『心中宵庚申』-近世文学総索引, 教育社／『北川蜩殻』『峠のすじ書』-洒落本大成, 中央公論社

[江戸]『通言総鑑』-洒落本大成, 中央公論社／『浮世風呂』-新日本古典文学大系, 岩波書店
[東国]『人天眼目抄』-中田祝夫・外山映次編著『人天眼目抄』勉誠社／『雑兵物語』-深井一郎編『雑兵物語』武蔵野書院／『平田篤胤書簡』-大鹿久義編『伴信友来翰集』錦正社

[盛岡]『御国通詞』-福井久蔵撰輯 国語学大系, 国書刊行会 (復刻版)

[庄内]『苦界船乗合咄』-洒落本大成, 中央公論社

[新発田]『鞭策録会割記』-東北大学狩野文庫蔵／『井東先生学談』-大倉精神文化研究所蔵

[秋山郷] 秋山牧之『秋山紀行』-信濃史料刊行会『新編信濃史料叢書』

[越中]『狐茶袋』-鈴木忠勝編『未刊雑俳資料』第35期 8

[美濃]『能郷猿楽狂言詞章』-日本庶民文化史料集成 4, 三一書房 (原本は非公開で彦坂未見)

[尾張] 山本格安『尾張方言』『宮訛言葉の掃溜』-『名古屋叢書 三編』名古屋市教育委員会／『刑部家旧蔵如来教説教記録』-中出惇「資料翻刻 刑部家旧蔵『説教記録』」『研究論集』3, 愛知大学短期大学部／『御由緒』-神田秀雄『如来教の思想と信仰』天理大学おやさと研究所／『春秋洒土伝』-京都大学図書館蔵／『叵多好鬻』『舞意鈔』『女楽巻』-洒落本大成, 中央公論社

[三河～遠州] 十返舎一九『滑稽大人 一九之紀行』-島田勇雄氏蔵 (文化期序文, 明治22年版)

[駿州]『阿倍川の流』-洒落本大成, 中央公論社／『東海道中膝栗毛』-日本古典文学大系, 岩波書店

[中国地方]「田植唄」－友久武文編『校本田植草紙』広島文教女子大学地域文化研究所／『石見方言茶話』－米谷隆史『『(石見)方言茶話』と『肥後方言茶談』をめぐって』『近代語研究会219回発表資料』近代語研究会

[土佐]「坂本龍馬書簡」－日本史籍協会編『坂本龍馬関係文書1』東京大学出版会

[九州地方]『磐水先生随筆』－菊池武人編『近世仙台方言書 続翻刻編』明治書院／『滑稽洒落一寸見た夢物語』『大和口上言葉集』－吉町義雄『九州のコトハ』双文社出版／一編舎十九（蒲原大蔵）『伊勢道中不案内記』－肥前史談会編著『伊勢道中不案内記』肥前史談会古書刊行部，および佐賀県立図書館・野中文庫所蔵本／『肥後方言茶談』－米谷隆史『『(石見)方言茶話』と『肥後方言茶談』をめぐって』『近代語研究会219回発表資料』近代語研究会／村山七郎編著『日本版 新スラヴ日本語辞典』ナウカ

[全国] 越谷吾山『物類称呼』－東條操校訂『物類称呼』岩波文庫

用例の引用は論証に妨げのない箇所の表記を改めたところがある。所在は、活字本はページ、写本などは丁数で示した。

謝辞

本稿が成るには、査読者と編集委員の長期にわたる懇切な教示によるところが大きいことを特に記しておきたい。

付記

本稿は平成10年～12年度科学研究費補助金による研究成果報告書（研究代表者 彦坂佳宣）全4章のうち第3章部分を大幅に改訂したものである。

（投稿受理日：2004年1月14日）

（改稿受理日：2005年1月4日）

彦坂 佳宣（ひこさか よしのぶ）

立命館大学文学部

603-8577 京都市北区等持院北町56-1

yht02860@lt.ritsumeij.ac.jp

A historical aspect of conjunctive particles denoting cause and reason: A contrastive approach using language maps and written materials from the past

HIKOSAKA Yoshinobu
Ritsumeikan University

Keywords

Grammar atlas of Japanese dialects (GAJ, *Hōgen bumphō zenkoku chizu*),
conjunctive particles, geolinguistics, written materials from the past

Abstract

This study contrasts Maps No. 33 and 37 in Grammar atlas of Japanese dialects (GAJ) with the written materials in the past to analyze the historical aspects of the conjunctive particles denoting cause and reason. Through this study, it was made clear that each conjunctive particle first appeared in the central part of Japan (Keiki) and radiated out from there in the following order: *ba* → *kara* → *ni* → *de* → *ken* → *hodoni* → *yotte* → *sakai*. Many waves of these particles reached the western part of Japan, whereas only a restricted number of such waves arrived in the eastern part because of the cultural and geographical fact that Keiki is situated closer to the western part than eastern part. It was further supposed that under such influence, some of the particles developed independently in specific areas, like *kara* in the eastern part of Japan, and *ken* in Chugoku area.

Previous studies indicate that the distinction of the usage between *kara* and *node* is observed in the Standard Japanese today. This distinction is also observed in the dialects of the central area like Kanto, Kinki and Chubu districts, whereas only one conjunctive particle is used in place of both *kara* and *node* in other dialects. This fact suggests that the dialects in the central area express cause and reason more precisely than do the dialects in the other areas. This distinction of the dialects in the central area is observed in the past as well.

This study sheds light on historical aspects of Japanese dialects as a whole.